

## 野生動物との共生をめざして②



斜里エコロード：道路両脇の針葉樹に沿って、防鹿フェンスが設置され、エゾシカの道路への進入を防ぐ。(北海道斜里町、筆者撮影)

## 野生動物のロードキル

北海道の豊かな自然環境を構成するさまざまな生物たち、私たち人間の営みが拡大していくにしたがって、狭められ分断されていった生態系。こうしたなかで今、さまざまな公共施設で、地球環境や身の回りの自然とのやさしい関係を再構築するための取り組みが始まっています。

このシリーズでは、野生動物に配慮した公共施設整備のあり方を探ります。

考えなくてははいけません。個体数が減少し、種としての存続が危険視されている動物、沖縄県の西表島にのみ生息するイリオモテヤマネコや、沖縄本島に生息しているヤンバルクイナなどにとつては、1件、2件の衝突による死であつても種の存続に重く影響してきます。

このように、対象となる動物や状況によって問題のポイントは異なりますが、私たち人間にとつても、野生動物にとつても、衝突は避けたい問題なのです。

**衝突を減らすための取組み**

このような事故を減らすため、いろいろな施設整備や対策が実施されています。

野生動物(特にシカ類などの大型の動物)との衝突防止対策の中で最も効果的といわれているのが、道路沿いに柵を設置して、動物の道路上への進入を防ぐ対策です。これに、動物の横断用通路(オーバーパス、アンダーパスなど)を併設し、さらに柵の内側(道路側)に動物が入ってしまった場合でも、柵の外に出られるように脱出用の施設も整備されます。この方法は、物理的に動物と人間の移動路を分かつたため、事故を減らす効果は高いのですが、100%事故を防ぐことはできません。道路がどこかにつながつている以上、どこかに柵の切れ目があり、そこから道路上に進入してきます。また、積雪や風雨にさらされて柵が傷んだり、人為的に柵に穴をあけられたりして、わずかな隙間ができると、そういう場所を目ざとく見つけて、柵の内側に入ってきてしまうのです。

このような対策で「事故率」を減らすことは可能ですが、完璧な対策はないのが現状です。そこで、柵などのハード整備の対策とともに、ドライバーへの注意喚起などの



道路上での動物の死体(左:キツネとカラス、上:キツネの死体近影)キツネとカラスはすぐそばに横たわっていた。先にひかれた相手を目当てに道路上に出てひかれたのか・・・。(筆者撮影)



車と衝突して動けなくなったエゾシカ(北海道西興部村、筆者撮影)

代表的な公共施設の一つである道路。道路による野生動物への影響(生息地の分断など)といった話題はいろいろな場面で取り上げられ、しばしば議論の的となつていきます。ここでは、その話題の一つであるロードキル(野生動物と自動車との衝突事故)について、北海道での取組みを紹介しながら考えていきます。

### 野生動物と自動車の衝突

皆さんは、野生動物と車がぶつかるというたらどんなことを思い描きますか。動物が轢かれてかわいそうと思う方もいれば、以前飛び出した動物とぶつかつて車の修理にお金がかかったとグチをこぼす方もいるでしょう。もしくは、普段、ドライブしていても動物なんて見たことないから自分には関係ないと思う方も多いかもかもしれません。しかしここ数年、北海道では、北海道を代表する野生動物の一つであるエゾシカとの衝突事故が増加しています。

エゾシカは、明治初期には大雪と乱獲によって個体数が激減し、阿寒などのごく一部の地域に残るのみとなりました。しかし、その後徐々に数を増やしつつ分布を拡大し、今では北海道のほぼ全域で生息が確認されています。

このようなエゾシカの分布拡大を背景に、エゾシカと自動車との衝突事故が増加しました。国土交通省北海道開発局の資料によると、エゾシカのロードキルは平成8年度には年間500件程度だったものが、平成15年度には1000件以上、2倍以上に増加し、事故の発生地域も主に東部地域だけだったのが北海道全体へと拡がりつつあります。また、この傾向は道路だけでなく、列車との衝突事故も増えつつしているのが現状です。

### 衝突による問題

エゾシカは数が多いのだから、車とぶつかつ

ソフト的な対策も重要な役割を担うのです。ドライバーへの注意喚起対策として、警戒標識が道路沿いのあちこちに設置されてきました。北海道の東部地域には、シカの注意看板は非常にたくさん設置されています。北海道旅行に来た方は、最初はシカの注意看板に感動して写真を撮ったりしますが、北海道を出るころには見飽きてしまうという話も聞きます。中には、かわいらしい動物のイラストなど、あまり注意を促す効果を期待できないようなものもみられます。いくら看板を設置しても、実際にドライバーに注意が必要であるということを伝えられなくては、意味がありません。

これからは、いつ、どこで、どんなことに注意しなくてはいけないのか、各場面での情報提供の方法や内容を吟味しながら選択していく必要があります。

北海道では、事故が多い時期には、電光掲示板に注意情報を出したり、沿道の施設でポスターやパンフレットを配布して注意を呼びかける取組みも行われています。道路情報ラジオなど、既設の施設を使って注意を促すことも可能だと思えます。また、実際にシカがいる情報や事故の発生状況をドライバーに知らせることも検討されています。いろいろなやり方があると思いますが、ポイント

は、衝突回避のベースとなる対処法を事前に提供して衝突事故に対する認識を高めるとともに、特に事故の可能



防鹿フェンスと道路(北海道斜里町、筆者撮影)



電光掲示板による注意喚起(北海道土幌町、筆者撮影)



脱出用施設(ワンウェイゲート)とエゾシカ(北海道斜里町、筆者撮影)

性が高い場所で、気をつけるべき時期に、ドライバーが信頼できる情報を提供することだと思えます。

ニホンジカやニホンザル、イノシシなど、野生動物の農業被害問題が日本各地でクローズアップされています。畑や家の周りには、必ず道路があります。そこは、車も人も動物にとつても生活圏内であることを考えると、野生動物との衝突事故は避けられない問題だと思えます。そうしたときにこうした北海道での事例が役に立つのではないかと考えています。

(社)北海道開発技術センター 研究員 野呂 美紗子



図 事故発生地域の拡大(左:平成8年度、右:平成15年度) 国土交通省北海道開発局資料より作成